奈良・旧大乗院庭園（きゅうだいじょういんていえん）

1　所在地　奈良市高畑町

2　調査期間　二〇〇五年（平17）七月～一〇月

3　発掘機関　奈良文化財研究所平城宮跡発掘調査部

4　調査担当者　代表　川越俊一

5　遺跡の種類　庭園跡

6　遺跡の年代　古代～近代

7　遺跡及び木簡出土遺構の概要

調査地は平城京跡左京四条七坊東端部にあたる。南都随一とうたわれた旧大乗院庭園の池が現在もその姿をとどめ、国の名勝に指定されている。奈良文化財研究所では、㈶日本ナショナルトラストによる庭園整備の基礎資料を得るため、一九九五年度以来継続して発掘調査を行なっており、過去にも木簡が出土している（本誌第二二・二四・二六・二七号）。

（奈　良）

今回の調査は、一連の発掘調査で往時の姿を現わした西小池の全容解明のための最後の調査であり、北池・中池・南池の三つの部分から構成される西小池のうち、南池の西岸から池尻にかけての部分、及び西小池西側に想定される庭園鑑賞施設や御殿に関わる遺構の状況の解明を目的とした。調査面積は五一七㎡である。

調査の結果、西小池西南隅部分をほぼ想定通りに検出し、従来の成果と合わせて約六〇〇㎡の大きさをもつ西小池のほぼ全容を解明することができた。新たな知見としては、池尻から西へ排水施設を設け、堰によって水量を調節していたこと、南池東岸に池幅を狭める改作の痕跡が見つかったことがあげられる。また、西小池西側で、江戸時代後半の『大乗院四季真景図』に描かれた堪雪亭に相当するとみられるあずまや風の庭園鑑賞施設、及びその南北に取り付く塀の痕跡を確認したことが特記される。塀の西側では、大小二つの水溜遺構を確認し、堪雪亭の利用方法を考える上で興味深い。

今回紹介するのは、堪雪亭に伴うとみられるこの二つの水溜遺構のうち、大型の水溜遺構SX八九八六の水溜用桶の底板外面に記された墨書と焼印である。桶は残存部最上位の直径が一〇五～一一〇cm、底面径九六cmを測る大型品で、外側下部には竹製の箍三条からなる「ぐい編み」が残る。桶の掘形は検出面で径一・三mと狭く、必要最小限の大きさしかない。桶内の埋土からは、桃核一点、寛永通宝一枚が出土している。

8　木簡の釈文・内容

(1)　「『大』（焼印）『乗』」　径1100×高(740)　061

水溜『大』（焼印）『乗』」

墨書は、桶の底板の下面（桶の外側の地面に接していた面）中央に大きく記されていた。水溜として設置する以前の逆さに伏せて保管していた段階に、用途を明記したものであろうか。

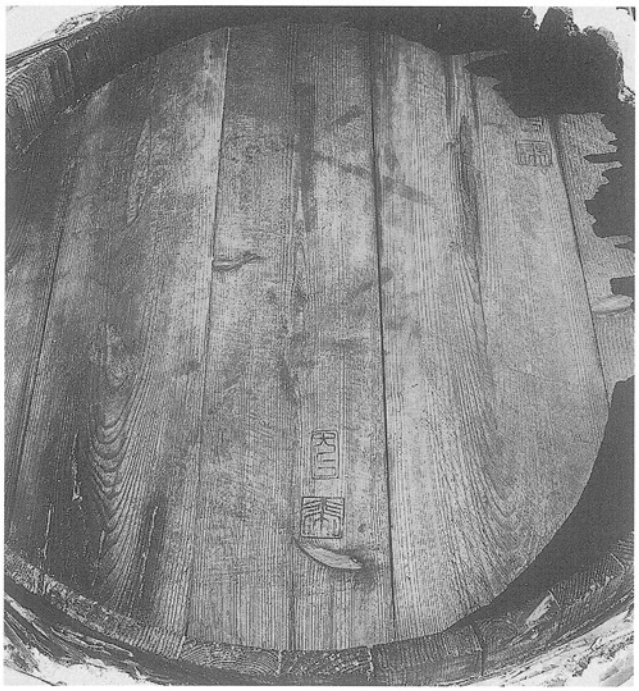
水溜 SX8986検出状況（西北西から）

焼印は、「水溜」の墨書の右側と下側にそれぞれ「大」と「乗」のセットで捺されている。大乗院の什物であることを示すとみられる。

9　関係文献

奈良文化財研究所『奈良文化財研究所紀要二〇〇六』（二〇〇六年）

（渡辺晃宏）



「水溜」の墨書と「大」「乗」の焼印